

東京の幼稚園今昔

山 村 き よ



日本の幼稚園創立90周年を迎えて、東京の幼稚園界の今昔を
かいてほしいとのこと、よろこんでペンをとったものの、想
は43年前の保育科在校時代、戦災で焼け残ったお茶の水校舎あ
とや、バラックでの不自由ではあったが楽しかった学生生活ま
で、走馬燈のように、目の前にはつきりと浮んできて、とても
10枚の原稿紙にはおさまりそうもないので、私の関係した公立
幼稚園研究会のことにしぼって記してみたい。

私は卒業後千葉市に奉職したが、東京に知人多く、ことに東
京市の研究会にはたびたびよんでいただいたり、お茶の水での
研究会にはかかさず出席していたので、その間多くの知人から
伝統ある東京の幼稚園のことや、その園長先生たちにも知人が
あったので、古い幼稚園のこと、研究活動など耳にしていたの
で古い歴史をちょっと記してみたい。

明治時代に創立された由緒ある幼稚園は次の通り、

- 麴町地区、麴町幼(明治17・3・15) 同、富士見幼(20・4)
 - 同、番町幼(22・11・22)
 - 京橋地区、京橋朝海幼(21・9・28)
 - 日本橋地区、常盤幼(28・4・7) 同、坂本幼(28・3・30)
 - 本郷地区、本郷誠之幼(文京区立第一幼稚園) 20・6・1)
 - 下谷地区、根岸幼(22・1・8)
 - 麻布地区、中之町幼(22・5・3)
 - 四谷地区、四谷幼(大正2・3・1)
- 以上10園で、ここに通園することもまたは上流のこともが多
く、保育料も1円〜1円50銭といわれ、しかも当時の先生方の
給料は15円〜18円であったとか?

園長は麴町地区と麻布地区のみ兼任で他は女の専任園長で、

そこは永く専任園長がつづき立派な伝統もつくられたということである。

以後だんだんと公立幼稚園が増設され麴町幼稚園に、故、土川五郎先生が兼任園長として就任された時は東京市の幼稚園は17園だったとか、(大正12)それでも研究体制をととのえて研究活動を開始されたとのこと、それが現在の東京都公立幼稚園教育研究会の前身ともいえる。(その間一時中止されたり、名称の変った時もあったが)

私が昭和11年5月、千葉県から東京市に出向命令をうけて赴任したところが麴町区富士見幼稚園で、小学校の三階が幼稚園の独立園舎のような感じで幼稚園の通用門は靖国神社に近い道路につづいていた。当時の公立幼稚園は約30園余り、しかしその大部分が併設幼稚園で、保育内容も「やさしく教えこむこと」のみ多く、一日の保育時間が五項目の配列で終ってしまい、朝の大切な時間が殆んど小学校と同じように「朝礼に参加すること」で終る」など驚きの連続であった。

しかし当時は倉橋先生の唱える「幼児の自発活動尊重」「自由遊びのまとめ」「朝礼廃止」などなど、私の先輩後輩が倉橋先生のご指導をまじめに現場へ持ちこんで、研究しておられる先生方もかなり大ぜいおられたために私も夢中になって「保育形態の研究」にうちこんだ。兼任園長の多い東京市の保育会は

年々盛んになって一ヶ年に一回は各区競って研究発表会をもつような自主的研究活動も盛んに行なわれていた。また当時の特徴としては兼任園長の殆んどが運営のすべてを主任保姆にまかせている幼稚園が多く、保育内容は勿論、区役所への交渉その他主任保姆の活躍場面は広範囲にわたっていた。

東京市の公立幼稚園といってもその区財政はまちまちで俸給も初任給35円〜40円、人件費、研究費、主任手当などさまざま、こうした運営の独自性が幼稚園の発展向上にも大いに関係があったように思う。

私の勤務していた麴町地区も皆さまから羨ましがられた場所で、区内4名の兼任園長たちがそれぞれ財源をみつめてきては施設設備を拡充したり研究活動にも応援してくださって、しかもすべてを主任保姆に一任して下さったので活発な研究活動が始まった。園内で使う「幼児体操の創作」「レコード集め」「人形劇・紙芝居の作成」などなど、昭和16年頃までは実に楽しい研究にあげくれた保育者生活で今から考えると夢のようである。

一方では倉橋先生の「保育法真諦」や「幼稚園雑草」の中の講演、雑誌の記事などからだんだんとこどもの見方が変わってくる幼稚園が増し、幼稚園の「朝のひととき」の大切なことがわかってきた先生方から「朝の集まりを中止しよう、一斉保育はやめよう」など論議の中心となることも度重ったが、併設幼稚園

の多い東京市の状態では兼任園長から「幼稚園は教育の場所である。自由遊びは放任と同じだ」ときつく戒められる、若い先生方もあって、ついで「保育案の必要論」に発展したように思う。

お茶の水の講堂で度々開かれた講習会でもこの「自由遊びの取扱い」「誘導保育」の実際問題になると、いろいろな質問がとび出し、時には倉橋先生に向かって「先生のお話はよくわかります。でも、やれないので、先生が一週間位保育なさるところを見せしてほしい」などの暴論も出て、先生を苦笑させた場面が今でもはっきり目に浮ぶ。

私たち東京の研究会員ははじめに先生のお話ととりくみ、何の関係もなく五項目をばらばらに配列していた日常保育をだんだんと生活主題によって組み合わせることに話し合ったり、紙芝居やお話の背景として、レコードやピアノ伴奏を利用することなど新しい試みを研究し合ったものだ。そのためには本郷第一幼稚園や、麻布の中之町幼稚園を会場にして各区から若い先生方を2、3名位ずつ研究部員として出し、回数を重ね、実際保育にはずいぶん役立ったように思う。

主任級の者は本郷第一幼稚園長の檜山京子先生（現在、草野）を研究部長として現場の記録をまとめる仕事をした。「観察」をテーマに年間指導計画表を作成するために、地域、場所、季節、あそびの材料などのバランスを考えながら宿題をもちよ

り、それをもとに各々の園で、実際に保育した記録をもちよって、とうとう年間指導計画なるものを作成したのに、大部分は火災で失ってしまった園が多いようだ。

また本郷第一幼稚園の近くに、弘田竜太郎先生がおられることを知り、数人の者で、簡単な作曲や、歌唱法のご指導をうけた。自分の作詞で歌ができ上って歌う喜びはほんとうに楽しい一ときで、ここでもピアノをひきながらお話を演じてみよう（ひきがたり式）しばらく研究会をつづけたが（2年位）小人数のためにいろいろ困難な問題もあって中止のやむなきに至った。

その頃麹町区では夏休みにこどもたちが規則正しい生活をしたり、母親と家庭で教育的あそびをしてもらうために「なつこのあそび帖」を編集した。それを東京市の保育会の仕事として保育会の仕事も「劇あそびの脚本集」創作とあわせて大きな仕事になり、この「なつこのあそび」は戦後、保育用品取扱店が目をつけて、現在では色刷りの立派なものが商品として出版されているが、東京都公立幼稚園では現在でも、各区選出の委員によって編集され安価で配布される仕事が続いている。

昭和16年12月、遂に太平洋戦争となり「小学校令」は「国民学校令」と改められ、東京のように併設園の多いところでは毎日の保育内容保育形態がどんどん変化していった。

個人的な生活をみつめて指導計画を立てると言うよりも常に

「指図に早く適応する生活態度の育成」「集団訓練」などに全力をあげていたように思う。

倉橋先生のお説もこの頃から少しずつ変化し、雑誌に書かれる記事からも「おや」と思うようなことにもぶつかった。

私の園も靖国神社を利用させていただいた誘導保育など及びもつかぬことで、毎朝列を組んで靖国神社に詣で出征兵士の武運長久を祈る姿と変ってしまった。そして更に悲しい事実は、5月30日(昭和19)戦時臨時措置法によって「公立幼稚園休止」となり、園長、教諭はもちろん、大ぜいの保護者と園児によって「涙の閉園式」を行なった日のことが、ありありと目に浮ぶ。そして一切の保育施設は閉鎖されたが一部の地区には戦時託児所として残り、6月には近県に集団疎開地をさがして小さい幼児たちが親もとを離れて行った。教職員もそのままの身分で区役所の学事係に、又は東京市役所に職場替をしたり、またある者は学童疎開の寮母となって東京を去った。私は一生をかけた仕事にあわれな終りをつけて長野県の山奥に両親と共に住み移った。しかしまた、思いがけなく戦後東京に再出奔の道が開けた。昭和25年頃から、幼稚園ブームがおとずれて一ヶ月に15園位ずつも私立幼稚園が誕生し、あれよあれよと思う間に、公立幼稚園は私立幼稚園の $\frac{1}{2}$ になってしまった。

しかし公立幼稚園も、千代田、中央には全小学校に附設され、

台東区などもだんだんと増設の気運にはなったが相変わらず東京市の中央部僅か8区にのみ公立幼稚園があり、文京区などは昭和26年まで第一幼稚園一ヶ所のために、8倍近くの入園希望者がうける6年間も続き園長をいためた時代でもある。(私もその一人で、いろいろとおもしろいエピソードもある)

昭和25・27年私は東京市港区西桜小学校教諭の身分で、幼稚園専門の指導員を命ぜられ指導部勤務となって市内の公立幼稚園の先生と研究会をもつ機会が多くなったので、私の30年来の夢である、「幼、小、連絡協議会」を教育庁指導部主催や、区教育委員会主催で開いていたことができたのに、ご参加くださる小学校側の先生が数少なく、しかも午前中の実際保育が終ると殆んど帰ってしまった方が多く残念なことこの上もなかった。しかし僅かに残られた校長先生や、指導部の他の先生方から「現在の小学校低学年の先生方が、幼稚園の先生ほどに環境づくりにファイトをもってあたってくださったらどんなに一年生の勉強が楽しくなるだろう」とはげまされることが多く、まずまずほっとして、よろこび合ったものだ。

このことは私ばかりでなくいろいろの先生方が手をつけられ「幼年教育研究会」「幼小連絡懇談会」などあちこちにもたれたが、同じような状態でなが続きしないようだった。(つづく)

(聖徳短期大学)